

成り損ないの君へ

くきゆる

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——凡庸で、どこまでも俗物的なあなたは、それでもこの世界で生きている。

もしかしたら居たかもしれない、一匹の喰種のお話。

成り損ないの君へ

目

次

1

成り損ないの君へ

喰種調書 対象：モドキ

性別：男 年齢：推定二十代 身長：170～80

赫子：鱗赫 レート：A～

最初に姿が目撃されたのが、第十二区。

上半身を覆う赫子から、当初赫者かその発展途中の半赫者と目されていたが、単に赫子を薄く引き伸ばして纏っていたものと判明。

装甲は薄く、赫子も鱗赫であるので見た目以上に脆い。

更に、纏つた赫子を伸ばして攻撃することが出来ないと推測される。

本物の赫者程の脅威はないと思われるが、上等捜査官一名をはじめ、複数の下位捜査官が犠牲になつてるので要警戒。

偽赫者という印象から、付けられた名称は”モドキ”

また、赫者とは違つた珍しい赫子であるため、ラボから赫包の早期提供要請がきている。

近々、討伐隊を派遣予定。

「——彼なんかいいんじやないかな？」

喰種調書を眺めながら、全身を包帯で覆つた男とも女とも判別つかないナニカが愉快そうに笑う。

CCGの機密資料である筈だが、この者がどうやつて手に入れたかは知る由もない。

「好きにしろ。使えるならそれでいい。使えなければ捨て置けばいい」

薄暗い部屋の中、白髪で長身の男が答える。

”いやいや、選り好みできる状況じゃないでしょ”とナニカが突つ込むも、男は取り合わない。

この二人が所属する喰種の大組織——アオギリの樹の本部は、CCGの大規模な襲撃を受けた。

幹部も何名かやられ、残っていた喰種はほぼ壊滅。

同時にコクリアを襲撃して強力な喰種をスカウトしたが、それでも元が取れたとは言い難い。

最も、幹部の中でも中枢に在る筈の二人はそれほど気にしていないようだが。

「お遊戯は上手そう!」

ケタケタ笑いながら、まだ見ぬ男を品定めするナニカ。

「あまり遊び過ぎるなよ」

これ以上付き合う必要はないと、それだけ言い残して男は部屋を出て行つた。

職業柄というか、言葉遊びが大好きなナニカは意味のあるような無いような台詞で周囲を引っ搔き回す。

まともに受け取つても、ろくなことにはならない。

「じゃあ、私も寄り道だ」

鼻歌混じりのご機嫌な足取りで、コンクリートの地面をぺたぺたと子供の様に走つていく。

まるで全てがシナリオ通りの茶番だと言わんばかりに。
ナニカは笑う。

晒う。



「——クソが」

東京が第九区の路地裏。

滴る血のような紅い両目を爛々と輝かせる中肉中背の男が、満身創痍でへたりこんでいた。

全身いたる所に裂傷と風穴を開けて、普通の人間ならとっくに死んでいるような状態である。

だが、この男は人間ではなく喰種だった。

人を喰らい、人間離れした怪力と、赫子という捕食器官をもつ食物連鎖の頂点。

とはいえ、現実は数の差と文明の力で日陰に追いやられている始末。

ボロボロになつているこの男が良い例だ。

食い場争いや喰種捜査官との小競り合いが積み重なり、日々消耗していく身体。

もはや、限界だった。

「治りが遅え……肉も食いそびれちまつたし、ふんだりけつたりだチクショウウツ！」

この男——白田栄座（シラタ エイザ）は、最近地方から上京してきた喰種だった。

東京以外では喰種はまともに生きられないとされるが、エイザ等のグループは暴力団と癒着し、安定した肉の供給や住居と引き換えに殺しなどの裏稼業を引き受けていた。

エイザの赫子は貧弱で、喰種としての力はかなり弱い方だったが、地方喰種の数自体が少ないので皆結束する傾向にあつたために争いは少なかつた。

しかし、その生活も長くは続かなかつた。

人間と協力を結ぶようになつて数年経つたある日、エイザ等の前に一匹の喰種が現れた。

純粹な日本産まれというには堀の深い顔立ちと、ただ立つてゐるだけで感じられる尋常じやない氣迫。

鋭い嗅覚を持つ喰種だからこそ分かる、濃密な同種の血の臭い。一目でまともじやないと分かつた。

”どうやら、ここは滓溜まりだつたみたいだね”

そう一言呟くと、次の瞬間には一人目の仲間の首が飛んだ。

呆気にとられていると、二つ三つと仲間だつたモノの首が宙を舞う。

恐怖と驚愕のあまり、戦う事も逃げる事もできずに腰を抜かして目の前の光景を焼き付けていた当時のエイザ。

その男がヒートアップするに連れ、全身を覆うように肥大化していく赫子。

それは一部の共食いを繰り返す狂人が至るという、赫者という形態だつた。

同じ喰種と比べても、正に怪物と形容するに相応しい。
結果、自分だけ残して仲間は全滅。

——されど、エイザはこの時、男に対して憧れのようなものを抱いてしまつた。

せせこましく人間とつるんで生きている自分と違い、この男には圧倒的な力があつた。

余裕綽々の笑みで自由気ままに殺して、犯して、奪つて。

そんな”特別”なヒトに、エイザはどうしようもなく焦がれてしまつた。

目の前の惨劇をどんな顔して見つめていたのかは分からないが、エイザ自身の人生觀すら変える光景だつたのはよく覚えていた。

こうしてエイザだけ気紛れで残されたのも、自分も将来同じような怪物になる運命だからだと都合よく解釈して、散らばつた仲間の屍肉を喰らつた。

食えたものじやないが、天災に等しいあの男に少しでも近づくには、仲間だらうが喰らわなければならぬ。

その後、地元を離れて上京していく過程で共食いを繰り返しながら、数か月前に東京へやつってきた。

赫包も少し増え、全く役立つ気配のなかつた赫子も使い物になるくらいには強くなつた。

遠距離まで伸縮させて攻撃するのは不得手だつたが、あの日みた赫者の男のように纏うことはできた。

マスク代わりに赫子で顔を隠し、腕や胴に巻きつけて補強する。接近戦では銳利な凶器となつた腕で相手を切り裂き、頑強になつた身体で攻撃を凌ぐ。

地方の喰種程度なら複数人束になられても負けなくなつた。だが、東京に来てみればどうだ。

そこら中に同種の臭いが充満し、食い場では喧嘩慣れした喰種にしそつちゆう遭遇する。

しかも一体一体が強い。

それだけではなく、東京にはCCG——通称白鳩と呼ばれる対喰種の総本山があり、あちこちで喰種捜査官が徒党を組んで喰種を駆逐している。

クインケと呼ばれる駆逐した喰種の赫子を箱に収めて武器化したものを使つてくるので、普通の刃物じや傷一つつかない喰種といえど、複数の捜査官を相手にすれば死は避けられない。

エイザのような共食いを率先して行い、気性の荒い喰種はすぐに目を付けられた。

きっかけは上等捜査官と、随伴していた下位捜査官の殺害。

苦戦はしたが、何とか勝利をもぎ取つたエイザは調子に乗つてい

た。

”俺も特別な側に足を踏み入れた”、と。

そして、すぐに自惚れであつたことに気付かされた。

次に投入された捜査官は準特等をはじめとしたベテランを固めた構成であり、間違つてもエイザのような半端に強い程度の喰種一体でどうにかなる相手ではなかつた。

人間の強みは、その数と知恵にある。

遠距離から羽赫のクインケが降り注ぎ、二の足を踏んでいると本命の甲赫や鱗赫の重く鋭い一撃が飛んでくる。

ベテランの連携を前では、エイザがまともに攻勢に出すことすら叶わなかつた。

なんとか隙をついて下位操作官を二人殺したが、逆に仲間を殺され憤怒に燃える人間側の攻撃を勢いづけただけだつた。

どうにか逃げおおせて路地裏に隠れたものの、満身創痍の死に体ではこれ以上逃げることもできず、見つかるのも時間の問題だろう。

「クソ……クソがッ！　俺じゃ……あの人みたいに、”特別”な側にはなれないのか……？」

エイザという男はどこまでも俗物的な喰種だつた。

知らないでいるうちは何ともなかつたが、いざ大きな力を目前にしたら、途端にそれが欲しくなつた。

現実を知らぬ子供のように、素直に、純粹に、自分の気紛れで世界をどうにかできるような力に憧れた。

人を従え、喰種を従え、王様のように祟められるビジョンを夢見て行動した。

そうは言つても、エイザにはあの赫者の男程の才能は無かつた。

無論、まだ強くなる余地は幾らかあるだろう。

けれど、才能には限界があることをエイザ自身が強く自覚してい

た。

共食いや捜査官殺しで自分に酔うことで誤魔化したが、そのツケが

今こうしてエイザに突き付けられていた。

自分が並の域を出ない、ただの有象無象であることなど百も承知だつた。

「なりてえ……俺も……特別に……！」

気力を振り絞つて立ち上がるエイザ。

追手が来る前に、まずは補給しなければならない。

この際、多少目立とうが構いしない。

——そう思つて動き出そうとした矢先。

「これ、食べる？」

「……あ？」

気づけば、エイザの前に全身を包帯で巻いた子供くらいのナニカが立つていた。

いつたい、何時からそこにいたのか。

そんな事を考える前に、エイザが培つてきた喰種としての勘が大きく警告した。

——コイツは危険だ、と

人とも喰種とも違う奇妙で濃すぎる匂い。

その本質が意味するのは、”死”だ。

死神が服を着て歩いているといつても過言ではなかつた。もしかすると、あの赫者の男以上の存在かもしれない。

エイザの姿をまじまじ眺めていたナニカは、痺れを切らしたのか手に持つてゐる赤黒い塊を無理矢理押し付けた。

押し付けられたものが人肉である事は分かつてゐたが、相手が相手だけに警戒を緩めないエイザ。

「そんな心配しなくとも、毒なんて入つてないし」

”取れたて、もぎたてのフレッシュビーフ”とほざくナニカを尻目に、肉の匂いを嗅ぐ。

食欲をかきたてる良い香りだった。

消耗している現状なら、堪える方が辛いほど。

もうどうにでもなれど、与えられた肉を貪るエイザ。

口の中いっぱいに新鮮な血肉が充満して、生の実感と幸福感が溢れだす。

「人間、それも準特等のお味はいかが？」

ナニカが、いたずらっぽく言う。

「準特等……？ ……まあいい。お前はなんなんだよ」

少し気になつたが、それよりも目の前のナニカが何者であるのかを問うのが先だつた。

あくまでも強気な姿勢で、口調で、ナニカに問う。

「あなた、臆病なのに強がりさんだね。むしろ、恐いからそうやつて吠えるのかなあ？」

ケタケタ、ニマニマ。

見透かされたように嘲笑われるエイザ。

言い返そうにも事実である以上、反論するだけ一層惨めな気持ちになる。

堪えるしかなかつた。

「——私はエト。アオギリの樹つていう組織なんだけど知つてるかな？ そこで、幹部……うん、幹部をやつてます！」

「アオギリ……」

東京にきて一年経たないが、アオギリの噂はエイザもよく耳にしていた。

数多くの強力な喰種を束ね、日本の喰種の中で最も大きい組織だということ。

そしてついこの間、CCGに大襲撃を受けるも、その間にコクリアを襲撃してSからSS級の喰種を何体もスカウトしたとか。

そのアオギリの幹部が自分になんの用向きかと、思案するエイザ。もしかしたら、自分が殺した喰種に仲間がいて仇討にきたのかもしれないと、まだ痛む身体に鞭打つていつでも迎撃できる体勢をとる。

「うんうん、君のその臆病さは生き抜くための武器でもあるんだね。でも、安心してよ。私はあなたをスカウトしにきただけだから」

エトと名乗った自称アオギリの幹部は、エイザを自陣に招きたいという。

確かに仇討なら、肉を与えてリこうして対話を試みるなんてまどろっこしい真似はしないだろう。

だが、疑問に思う所はあつた。

「……俺をスカウト？ わざわざ、アオギリの幹部が赴いてまでこの俺を？」

「そうそう！ こないだの戦いで大勢死んじやつたからさ。強い喰種はいくらでも大歓迎つてワケ」

強い喰種、と言われて嬉しくないと言えば嘘になるが、手離しで喜べる程エイザは本心から自惚れているわけではなかった。

エイザは並よりは強いかもしけないが、S級に届くかと言われば否だ。

珍しい赫子で悪目立ちした分、見かけ倒しというレツテルがいつも付き纏っていた。

「それに今なら、幹部の椅子が空いてるよん」

「幹部だと……？　おい、いくら俺が馬鹿でも、そんなんで騙せるとでも思ってるのか？」

その辺に幾らでもいるゴロツキの喰種を、大組織の幹部の椅子へ添える。

少し知恵のある者なら、裏があると勘織つて当然だろう。

「ほんとだつて！　まあタタラさん……うちの参謀にお目通りしないとだけど、裁量は私に任せられるから安心してくれたまえよ。あなた、喰種を率いてたことはある？」

「……殆どねえよ」

「じゃあ、合格」

「なんでだ!?」

「ほんの少しでもあるなら十分だよ。うちには強い人多いけど、皆自分勝手だからねー。あなたみたいにまともっぽい人も欲しいなーって！」

”私もまともではないけどね！”と付け加えるエト。

本当にアオギリの幹部なのかと疑わしくなつてきたが……。

「——悪い提案じゃないし、そもそもあなたには拒否権はないの。私の提案に乗れば、あなたが欲しいと思っているモノは全部手に入る。乗らなかつたら、遅かれ早かれあなたは死ぬ。私以外の手によつてね」

雰囲気が変わる。

おちやらけた態度からうつてかわり、エイザを脅すように追い詰める。

「欲しいんでしょ。力とか、地位とか、名譽とか。いいよ、全部あげる。私がお膳立てした椅子に座つて、ご馳走を喰らつて、召使を侍らせれば、きっとあなたもご機嫌になれる」

拒否権はないと脅しながら、素直に応じた時の飴をイヤになるほど露骨にチラつかせるエト。

しかも、その飴玉は地面に転がされて汚れきつたものだ。
もはや拾うのは屈辱の域だつたが……。

「……俺は大組織の幹部になれる程の力はない」

エイザはその飴玉さえ欲する程に飢える餓鬼であった。
見せかけでも、はつたりでも、”特別”になれるなら何でも良かつた。

「そうかなあ？ 準特等率いるベテラン捜査官を皆殺しにした”S級”喰種のモドキなら、十分だと思うけど」「ツ！？」

——違う、殺したのは間違いなくエトだ。

それを分かつた上で、エトは”お膳立て”だと称したのだ。

襲つてきた捜査官を本当に皆殺しにしたのなら、S級認定は確実だろう。

”もう殺したという事実は覆らないぞ”と、エトの窪んだ眼窓がそう訴えかけているように感じた。

エイザが生き残るにはエトの提案を呑むしかない。

だから、これは仕方ないことなのだと自分に言い聞かせる。

「——分かった。俺は今日からアオギリの幹部、S級喰種”エイザ”だ」

かつこ悪いと罵られても構わない。

才能のない己が特別になるには、なりふりなんか気にしてられない。

ああ、名乗つてしまえばなんと心地の良い肩書だろう。

発した口から、舌から、欲望まみれのテツペンまで麻薬のような快樂で狂わせる。

「おお、なんか貫録あるねえ。じゃあ改めて歓迎するよ、エイザさん」

「ああ」

——こうして、一匹の凡庸な喰種がアオギリに加わった。

彼には世界を変える力もなければ、運命を切り開く要素も持ち合わせていない。

ただただ、物語の端っこを彩るだけの飾り道具。

”特別”を求めて、どこまでも貪欲に地を這う惨めで哀れな男。

それでも、間違いなく、一匹の喰種はそこに生きていた。